

【2014-07-13】 ブルー・ア  
ルタイトルを一杯



三方を窓に囲まれたこの部屋には、朝の優しい日の光が斜めに差し込み、プリズムとなってきらきら踊っていた。

外から聞こえてくる鳥たちの声以外は、何の音も聞こえない。鉄道も自動車も、自転車さえも見かけなかったから、当然のことかもしれない。

リラも、みどりも、室内の調度品や生活用品につれづれ目を向けたり、ゆっくりと紅茶を味わうだけで、完全に満ち足りている様子だ。

ポニー・Cは、さっきから外の景色を眺めている。時折り、屈託なく揺れる彼の尻尾が、乙女のポニーテールのように優しくなびいた。

この、朝の光と樹木の香り、アールグレイ風の紅茶の風味を、ただただ堪能する老夫婦とともにいて、小鳥たちの声を聞いているだけで、私にはもうなにも要らなかった。

彼らに満ちている幸福が、しんと、雪のように私の中に積り始めていた。

私は、これらのすべてを、いまを、静かに感じていたかった。

ただいるだけで、満たされているという感覚を。もしかしたら、「永遠」そのものかもしれないと思える、その感覚を...

「アルさん、といいましたね...」

わたしに、何か尋ねたいことはおありですか。

一緒に、ご案内することもできます」

しばらくして、アキーラが口を開いた。

アルタイル人たちの食べ物と健康について、聞きたいことはたくさんあったが、老夫婦から放たれている至福感が、いったいどこをその源、投げ所としているのかを、まず知りたいと思った。

かつて、地球でこのような幸福感を味わった記憶がなかったのだ。

ましてや、ここは、宇宙船の中の、いわば疑似自然空間であり、仮想ではないか...。そんな場所に、本物の、リアルの地球にも優る至福感が存在することが、私には不思議に思えた。

「あなたのおっしゃる通りです。

わたしたちとて、最初はあなたと同じように感じたものです。わたしたちの星と比べれば、はるかに小さく有限な宇宙船内の空間に、星にも優る喜びを見出すなどとは、夢にも考えていませんでした」

アキーラの老いた瞳を、少年のような光がきらきら覆っていた。

「これから、上のサナトリウムに行かれれば、お分かりいただけるでしょうが、わたしたちの星には、病気というものは存在しません。病気のメカニズムを理解していますから、私たちにとっての医療とは、正確には予防医療を意味します。ですから、地球のような多数のベッドを完備した病院はありません。

まれに事故が起きた際の、緊急処置施設は用意されていますが、星の人々が利用することはめったにありません。他の星から手当てを受けにやってくる存在たちや、銀河を探索中に遭遇した怪我人が搬入されることの方が大半なのです。

もちろん、わたしたちも、地球人とは異なった次元での体をもっていますから、老いがあり、その体の死があります。

わたしたちの平均寿命は、地球で言えばおよそ900歳ほどですが、ほとんどが自然死であり、手術中や術後を含め、手術による死はありません。

すべての死は、しかるべき時に訪れ、誕生とともに、自然な現象の一つとして受け入れられるのです。ですから、アルタイルには、延命という行為もなく、病院のベッドの上で亡くなるということもありません。死期が近付いたことを知ったなら、それぞれの好きな場所に帰って、静かにその時を待つのです。

たとえそれが、たった一人きりの山の頂上であっても、家族に囲まれた我が家のベッドであっても、その人にとっては、そこが、移行するための最善の場所であることに、変わりありません」

「アルタイルには病気がないならば、人々が老いて死ぬことはどういうことなのでしょう。

老衰も、原因を突き詰めれば、さまざまな機能不全、つまり、病気なのではないでしょうか」私は浮かんできた疑問を、率直にぶつけてみた。

幾何学模様のテーブルクロスの上で、スタンドガラスの皿花瓶に浮かんだ蓮の花が、ゆらゆらたゆたうている。

ライラが、それに指先で触れるようにしながら言った。

「体は、誕生し、成長を遂げ、やがて衰退し、消滅するようにプログラムされたものです。

ですから、私たちは、老衰の症状を病気とはみなしません。それは、自然なプロセスの一つだからです。

一方、病気とは、このプログラムに反し、不自然な要素によって生み出される不調和な状態のことを指します。不調和な状態自体が、元に戻るための、一つの反応ですから、それを生かしてあげれば病気は治ります。

ところが、あなたの星では、病気の症状そのものを取り除こうとします。

炎症、症状を悪いものとし、それを切除、焼き払おうとしたりします。

猛毒をもって攻撃、撃退しようとしています。

その結果、本体が死んでしまおうとも、それはどうでもいいのだとでも言うかのように...

残念ながら、地球で行われている医療とは、私たちの宇宙では、愚かな破壊でしかありません。その行為は、今や、星自身に及んでいます。

いま、宇宙の多くの存在たちが、そのことを憂い、案じ、祈っています。

地球の悲鳴が、宇宙全体に届いているのです」

ライラの話聞くうちに、私は地球にいる母のことを思い出していた。

母は、若くして夫である私の父を病気で失くして以来、女手一つで私と妹を育ててくれた。気丈で、泣き言一つ言わない人だった。

体はあまり強い方ではなく、時々病気で倒れることがあったが、そのたびごとに、周りの人たちに助けられ、なんとか社会復帰することができていた。

そんな母が、五十を過ぎたあるとき、再び病に倒れた。公的な検診によって、乳がんと診断されたのだ。

初期段階の小さなしこりとて、早期発見～切除～治療を推奨する医療行政を信じ、母は腫瘍の摘出手術を受け、放射線、抗がん剤治療を受け入れた。

病院側から言えば、手術も治療もすべて順調に進み、母は今も生きているということになる。癌で死ぬところが助かったということになるのだろうが、母の現状をみると、私にはとてもそう思えなかった。

たった半年の間に、壮年期を終えてもなお、しなやかさと濃密さを保っていた母の自慢の黒髪は、見る影もなく薄れ抜け落ち、焼き払われた後の荒野をみる思いだったし、顔や手足の皺は一気に増え、十キロ近く落ちた体重は、何をしても、もう元には戻らなかった。

母は今や、壮年期の活力ある時期を一気に早送りされ、力ない老年期の姿に変わり果てていたのだ。

(これが医療というものなのか…)

だとしたら、僕には医療など必要ない…

母は一体、あの手術を受ける必要があったのだろうか…

検診など、決して受けなければよかったのに…)

そう何度も自問し、別のオプションはなかったかのかと、模索する日々が続いた。

日々、病気と闘いながらも、確実に、急速に老けこんでいく母の姿は、直視するにはあまりに辛すぎた。

「ライラさん、確かに、あなたの言うとおりです。

地球で言う医療とは、どこか不自然で、恐ろしいものだと思います。現に人間は、環境を大きく壊し、汚染によって自分たちの体を病気にしています。自然界の生き物たちの環境も蝕み続けています。

でも、どうして、いつからそのようなことになってしまったのでしょうか」

ライラの言葉が真実であると感じた私は、縋るような気持ちでそう訊ねた。

レースのカーテンの裾がすこし揺れて、皿花瓶に浮かんだ蓮の花が、小さく波紋を描いた。

私は、次の彼女の言葉を、一言も聞きもらすまいと息をひそめた。

「いつからということになれば、あなた方の世界の時間軸が動き出したときから、ということが出来るかもしれませんね。

別の言い方をすれば、科学的、物理的知識が急速に発展を遂げ、心の発展がそれに追いつかなくなった時ということもできます。

つまり、産業革命が起きた頃に、そうした動きに拍車がかかったと言えます。

こうした知識のアンバランスは、地球の歴史において、これまで何度も繰り返されてきました」

ライラは、私の目を見ると、少し微笑むようにして、静かにそう言った。

私は、地球で毎日のように繰り返し起きている、不幸な事件や悲惨な事故、人が人に行く、さまざまな極悪非道の行為、内紛や戦争を思い出していた。

こうしたすべての愚かな所業を解決するすべなど、人類は持ち得ていない。にもかかわらず、(一つずつ解決していくことができる...)

誰もがそう信じたがっているだけなのではないだろうか...

地球での一社会人としての生活を数十年続けてきた私には、いつの日からか、そのような諦観が生まれていた。

(政治が、次の選挙が、デモが...)

憲法が、議会制民主主義が、それを実現してくれる...)

こうした、縋るような信念も、日々の忌まわしい現実の出来事の前に、少しずつ、確実に瓦解してくのを、ただ観ているしかなかった。

鳥たちのさえずりが止まり、静寂の中、カーテンの白い影だけが、微風に動いている。

「だからこそ、あなたはこの宇宙船に乗ったのです。

あなたの中での、完全なる敗北に対し、あなた自身が気づき、100%負けを認めたからこそ、次のステップとして、あなたのこの旅が始まったのです。

お分かりですか」

いままでずっと黙って聞いていたポニー・Cが、紅茶のカップを置いて向き直るとそう言った。

「そうです。

その通りなのです。

あなたはきっと、この旅が終わるまでに、答えを見つけるでしょう。

そのためにこそ、私たちはここに暮して来たのです。

あなたが答えを見つけ、地球へと持ち帰るために...」

アキーラが、両の掌をポンとテーブルに置くようにして、大きく微笑んで立ち上がった。

みどりとりらは、椅子から立ち上がると、互いの手を取り合って微笑んだ。

私の中に、ほのかな光が点るのを感じた。

小さくとも、力強く周囲を照らす暗がりのロウソクのような、希望という光だった。

私とみどりとりらは、それぞれアキーラとライラと別れの言葉を交わし、感謝の思いを伝える

べくハグをし合った。

老夫婦は、サナトリウムへと向かう私たちを、名残り惜しそうにして、いつまでも見送ってくれた。

【2014-07-13】 ブルー・アルタイルを一杯

<http://p.booklog.jp/book/87972>

著者 : b-svaha

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/b-svaha/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/87972>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/87972>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ